

Title	野崎充彦教授略歴・著作目録その他
Author	
Citation	人文研究. 72 卷, p.1-7.
Issue Date	2021-03-31
ISSN	0491-3329
Type	Others
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	野崎充彦教授：井狩幸男教授：大場茂明：池上知子授退 任記念

Placed on: Osaka City University Repository

野崎 充彦 教授

略 歴

【学 歴】

- 1980年3月31日 関西大学法学部法律学科卒業
1985年3月31日 大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了
1986年2月28日 韓国東国大学大学院碩士課程修了
1990年3月31日 大阪市立大学大学院文学研究科後期学士課程単位取得退学

【職 歴】

- 1990年4月1日 大阪市立大学・梅花女子大学・阪南大学非常勤講師（1991年9月まで）
1991年10月1日 大阪市立大学・文学部講師（1994年3月まで）
1994年4月1日 大阪市立大学・文学部助教授（2003年3月まで）
2003年4月1日 大阪市立大学大学院文学研究科・文学部教授（2021年3月まで）

研究業績

【著 書】

- 『韓国の風水師たち』単著（人文書院、1994年6月）
『朝鮮の物語』単著（大修館書店、1998年9月）
『韓国の風水師たち』韓国語版（동도원、2000年3月、ソウル）
『アジア諸地域と道教』、『講座道教』第6巻、遊佐昇・増尾伸一郎・野崎充彦共著（雄山閣、2001年10月）
『コリアの不思議世界』単著（平凡社、2003年8月）
『慵斎叢話——15世紀朝鮮奇譚の世界』単著（集英社、2020年6月）

【訳 書】

- 『朝鮮の道教』車柱環著、三浦國雄・野崎充彦（人文書院、1990年6月）
『中国古典文学と朝鮮』韋旭昇著、柴田清継・野崎充彦訳（研文出版、1999年3月）
『青邱野談』野崎充彦訳注（平凡社、東洋文庫、2000年5月）
『洪吉童伝』野崎充彦訳注（平凡社、東洋文庫、2010年6月）
『韓国映画100年史』鄭琮樺著、野崎充彦・加藤知恵訳（明石出版、2017年3月）

【論 文】

- 1984年2月 「イヤギクン—朝鮮の口誦芸人」、『Studium』13号、大阪外国語大学
1986年10月 「<胡人採宝譚>の朝鮮的展開——許生別伝を中心に」、『朝鮮学報』121輯、朝鮮学会
1988年10月 「朝鮮野談と道教説話——北窓説話を中心に」、『世界口承文芸研究』9、大阪外国語大学口承文芸研究会
1990年12月 「夢説話類型考——『太平広記』を中心に」、『中国学志』需号、大阪市立大学

- 中国文学会
- 1992年2月 「『海東異蹟』攷」、『大谷森繁博士還暦記念朝鮮文学論集』、杉山書店
- 1992年12月 「現代韓国の風水説」、『人文研究』第44巻第1分冊、大阪市立大学文学会
- 1994年12月 「慵斎叢話——十五世紀士大夫の視野と語りの世界」、『人文研究』第46巻第8分冊、大阪市立大学文学会
- 1996年12月 「朝鮮断脈説の形成について」、『人文研究』第48巻1分冊、大阪市立大学文学会
- 1997年10月 「檀君の位相——固有と外来の相克」、『朝鮮史研究会論文集』第35号、朝鮮史研究会
- 2000年5月 「道教の朝鮮化について」、『アジア遊学』16号、勉誠出版
- 2000年10月 「韓国国仙道の世界」、『東アジアの身体技法』、勉誠出版
- 2000年12月 「道教と朝鮮文学——民族主義と反儒家主義的論理の結合」、『道教と東アジア文化』、国際日本文化研究センター国際シンポジウム13
- 2000年12月 「パンス試論——朝鮮盲僧の占ト・呪詛・祈雨について」、『人文研究』第52巻、大阪市立大学文学会
- 2001年10月 「韓国道教研究史小史」、『アジア諸地域と道教』、雄山閣
- 2001年11月 「野談集に表れた温陽鄭氏の肖像」、『道教文化研究』第15輯、韓国・韓国道教学会
- 2002年3月 「朝鮮の異人像——『国朝人物考』を中心に」、『大谷森繁博士古稀記念 朝鮮文学論叢』
- 2003年3月 「呪いのモノ——李朝巫堂呪詛事件の事例から」、朝倉敏夫編『「もの」から見た朝鮮民俗文化』、新幹社
- 2004年12月 「<東海無潮説>攷」、『人文研究』第55巻、大阪市立大学文学会
- 2005年8月 「韓国のユートピア」、金泰俊編『文学地理・韓国人の心象空間』、韓国・論衡社
- 2006年10月 「日本翻訳文化における韓国文学」、『翻訳と人文学』、韓国・高麗大学校・文科大学創立60周年記念国際学術大会
- 2007年12月 「儒者と怪異——成任と林羅山」、『Journal Of Korean Culture』9、韓国・高麗大学
- 2008年10月 「時調——朝鮮的叙情のかたち」、『韓国語教育論講座』第4巻、くろしお出版
- 2008年12月 「朝鮮時代の圃隱像野史・野談類を中心に」、『圃隱学研究』第2輯、韓国・圃隱学会
- 2008年12月 「朝鮮古典資料と芸人譚」、染谷智幸・鄭炳説編『韓国の古典小説』、ベリかん社
- 2010年4月 「朝鮮の説話——人物説話の時代」、小峯和明編『漢文文化圏の説話世界——中世文学と隣接諸学』、竹林社
- 2011年7月 「朝鮮のセルフイメージを求めて」、『説話文学研究』第46号、説話文学会
- 2012年7月 「15世紀朝鮮における宗教文化」、『近代東亜城市社会群体与社会網』、台湾・中央研究院近代史研究所
- 2012年11月 「仲井健治先生の研究活動の再照明——白湖林悌を中心に」、『白湖林悌の生と文学』、韓国・全南大学湖南研究所
- 2013年10月 「風水マスターを通じてみる韓国風水の特質」、『術の思想』、風響社
- 2015年10月 「記憶の作法——現代韓国映画の地平」、『韓国朝鮮の文化と社会』14号、韓国朝鮮文化研究会

- 2016年3月 「朝鮮<道統>形成の一側面——『東儒師友録』を中心に」、『東アジアの都市構造と集団性』、大阪市立大学文学研究科叢書9
- 2017年8月 「朝鮮断脈説の形成再考」、『漢字漢文研究』12号、韓国・高麗大学
- 2018年1月 「日本における韓国古典の紹介と翻訳史」、『韓国古典学の新たな模索』、韓国・成均館大学大東文化院創立60周年記念国際学術大会
- 2018年6月 「倭乱文学の位相——「崔陟伝」はどこに位置するか」、『古代学研究所紀要』25号、明治大学
- 2018年8月 「翻案小説の技法について」、『漢字漢文研究』3号、韓国・高麗大学漢字漢文研究所
- 2018年10月 「朝鮮時代の疾病と医療観——天人相関の視点から」、『韓国朝鮮の社会と文化』17号、韓国朝鮮文化研究会
- 2018年11月 「『瑣尾録』に見える奴婢の生態について」、『韓国語文学と文明の交錯』、韓国・韓国語文研究会
- 2019年3月 「洪吉童琉球渡海説の再検討」、『八重山博物館紀要』第23号、石垣市立八重山博物館
- 2020年10月 「遥かなるキム・ジョンウン——或る在日コリアンのライフヒストリー」、『韓国朝鮮の社会と文化』19号、韓国朝鮮文化研究会
- 2021年3月予定
「朝鮮の野談と歴史書——戦乱ものを中心に」、小峯和明編『東アジア文化講座』第3巻、文学通信社
- 2021年3月予定
「朝鮮の時調——漢訳時調について」、金文京編『東アジア文化講座』第2巻、文学通信社

退任のご挨拶に代えて

野崎 充彦

市大に赴任して間もなく、今も忘れられない出来事がありました。当時の文学部（特に語文系）には学界を代表するばかりでなく、社会的にもよく知られた先生が少なくとも各教室に一人や二人はおられたものです。ある日、そのような方の一人に声をかけられました。「君の専門は朝鮮の古典文学だそうだが、朝鮮に読むに値する作品があるのかね？」と。

今なら、どれほど当該分野では優れた方であろうと、専門外では的外れな言動をしでかす「裸の王様」然とした御仁が珍しくないことはよく存じていますが、当時まだナイーブだった私はその言葉に真剣に悩んだものです。「こんなエライ先生がそうおっしゃるからには、自分は価値のないものに取り組んでいるのかも知れない」と。

無論、一方でそういう「決めつけ」が生じるにはそれなりの背景があることも承知していました。戦前、朝鮮研究の牙城はいうまでもなく京城帝大でしたが、日本の敗戦とともに一夜にして瓦解してしまいます。それでも朝鮮史研究は東洋史へ、朝鮮語学は言語学へ、朝鮮民俗学は文化人類学へというように、その一部は戦後の新制大学に辛うじて引き継がれていったものの、唯一、朝鮮文学（特に漢文学）だけは殆ど受け皿が無かったからです。

その結果、戦後の日本では研究者は罕で学生も育たず（これは今も変わりませんが）、まともな訳注付きの翻訳さえ皆無という実に荒涼たる状況でした。そこで、まず私が考えたのはできるだけ良質の訳書や概説書を出版し、無知に基づく無理解の是正に取り組むことでした。韓国・朝鮮といえば人権・社会問題にしか関心を持たないのは現代日本の知的怠慢にほかなりませんし、それこそは研究者が真っ先に取り組むべきものだからです。そのためには何よりも名の通った出版社から本を出すことが必要ですが、手前味噌ながらこれについてはまずまず目標を達成したものと思っています。特に、伝統と権威ある平凡社東洋文庫で刊行できたことは朝鮮古典文学の位相を高めるのには役立ったはずで、十年に一冊というスローペースながら、今その三冊目に取り組んでいます。

ところが、肝心の古典文学研究では難渋を極めました。なぜなら、日本文学的な感覚で臨めば、朝鮮時代後期はともかく、中期までは小説らしい小説は指折して数えるほど。登場したとしても「点と線」のような具合で、とても文学史の態をなしませんし、演劇に至っては二十世紀初頭までソウルには劇場さえないという有様でした。さらに作品では舞台も登場人物も中国という場合も少なくありませんし（お手本にした翻案小説の圧倒的な影響です）、たとえ朝鮮が舞台であっても筋書きは才子佳人によるワンパターン。時代や社会・人間を精彩ある筆致でリアルに描いた作品はめったにお目にかかれず、その体たらくにはほとんど愛想が尽きかける

他なかったからです。

その隘路を回避すべく、私は野談と呼ばれる朝鮮後期に盛んに書き継がれた漢文人物説話に目を付けました。日本でいえば『今昔物語集』世俗部の如く王侯貴族から巷の庶民、果ては盗賊や妖怪に至るまで多彩な登場人物たちは何より興味深く、私の渴望を満たすのに格好のものであったからです。訳注『青邱野談』はその成果の一つですが、それと同時に説話の背後にある風水やシャーマニズム・道教といった民間信仰にも目を向けるようになりました。特に風水信仰は古代から現代まで連綿と受け継がれて社会的にも大きな影響を与えており、儒教一辺倒で語られがちな朝鮮時代の立体的な把握に有効なものです。また各地へのフィールドワークは文献だけでは得られない知見をもたらし、大きな収穫を得ました。

最初の著書が『韓国の風水師たち』で、韓国語訳まで出てしまったためにしばしば誤解を受けるのですが、私の場合、決して民間信仰や歴史そのものが対象ではなく、あくまで様々な民間信仰や歴史・風俗などが生み出した「物語」を抽出するのが目的です（『朝鮮の物語』）。それこそが既成の文学作品に欠如するリアリティを獲得し、「朝鮮の不在」を補填してくれるものと期待したからに他なりません。この志向性はやがて説話から士大夫の随筆類へと対象を拡大していくこととなります（『慵斎叢話—15世紀朝鮮奇譚の世界』）。

しかし、その一方で内心に鬱屈する不満も増大していきました。なぜなら、物語の抽出作業自体は興味深いとしても、「朝鮮に読むに値する文学があるのか？」という疑問にいつまでたっても正面から答えられていなかったからです。それには文学概念そのものの再検討が必要なことを漠然と感じていたものの、そういう問題意識を共有できる研究者は韓国にも見当たらず、自分の考え方そのものが間違っているのかと自問自答する日々が続きました。そういうところに出会ったのが高橋亨の『朝鮮文学講義ノート』だったので。

高橋亨（1878～1967年）とはかの京城帝大で初代の朝鮮文学講座を担当、文学のみならず『李朝仏教』など思想・宗教研究にも膨大な業績を残し、戦後の一時期は天理大学で教鞭をとった人物です。高橋は大学を去るとき、京城帝大時代の110冊に及ぶ講義ノートを弟子の一人に託しますが、何故かそのノートは公開されませんでした。詳しい経緯は省きますが、後年ようやく思想関係の66冊と文学関係の44冊とがそれぞれ別の韓国人研究者の手に渡ることになり、或ることが機縁で私は文学関係ノートの復刻と翻訳作業プロジェクトに加わることになったのです。

くずし字混じりの達筆な手書きのノートを解読するのは想像以上に困難な作業でしたが、何より私を驚かせたのは高橋の文学概念でした。高橋は「此ニ所謂ノ文学トハ廣義ニテ言フ者ニシテ、文語ヲ以テ表セル一切ノ思想的産物ヲ包含ス」、つまり詩歌や小説のみならず、思想や学術的なものは勿論のこと、いわゆる公用文のような実用的な文章まで含む。言い換えれば、内容の如何に関わらず、文章表現（漢文）として優れたものは全て文学と見做すと言っているわけです。

どちらかといえば私が士大夫の「私的」な面に関心を寄せていたのに対し、そのみならず「公的」な活動をも視野に入れ、そこから読み解こうとする高橋の方法には虚を突かれた思いでした。しかし、考えてみれば公私は表裏一体であり、また「文を以て人を用い、文を以て公事をなす」のが朝鮮士大夫社会であってみれば、高橋の方法は極めて妥当なものといえましょう。

このような文学観は中国古典にかつてあり、日本でも近代初期まで受け継がれたものの、それ以降はガクモンの欧米化によって影を潜めます。高橋は英語にも堪能でしたので、近代文学研究の概念を知らなかったわけではありませんが、朝鮮文学の全体像を探求するためには敢えてそれを捨て、先祖返りともいうべき方法論を採用したということです。

しかし、それは単なる復古主義やジャンル分類にとどまるものではありません。古来、文人は先人の作品を学び、またそれに対し月旦することが習わしでもありましたが、高橋も古の文章家・詩人と同等格、いや時にはそれ以上の立場で作品の良し悪しに峻厳なる評価を下しており、これには実に驚きました。それこそは高橋の己れの鑑賞眼・審美眼に対する自信と自負の反映に外なりません。今日の研究者には殆ど望むべくもない境地だからです。私が翻訳を手がけた韋旭昇（北京大学の朝鮮文学研究者）の『中国古典文学と朝鮮』は中朝古典文学の相関関係をトータルに論じた優れた比較研究ですが、高橋の読みの深さ広さに比べれば、表面的で浅く色褪せたものにしか見えないほどです。

士大夫の個人文集や史書のみならず(中国古典は無論のこと)、燕行録のような旅行記に至るまで遍く文献を渉猟し、またそこから自在に引用する高橋の学識には驚嘆するほかなく、今日の研究者には整備されたデータベースなしに高橋が踏破した領域を追うことさえ殆ど不可能でしょう。まさに天才とはこのような人物を指すに違いありません。ですので、私のような浅学菲才が高橋ノートに挑むのは恰も軽自動車ですーパーカーを追いかけるに等しいものですが、だとしても私にはこの作業が楽しくてならないのです。

かつて韓国には「못 배우는 한」(学べない恨)という言葉がありました。貧困などでまっとうに学べなかったことに対する恨み辛みといった意味ですが、私のこれまでの過程も全く同様といえましょう。教を乞うべき師にも出会えず、切磋琢磨すべき同学もないのは、まともなルートも知らずにひたすら頂上をめざす登山と同じ。長い彷徨と悪戦苦闘の末にようやく出会えた高橋ノートは一大鉅脈にも比すべきもので、積年の「못 배우는 한」がここに来てようやく解き放たれた感があります。かの孔子は「五十にして天命を知る」と喝破しましたが、私のような凡才なら「六十にして天命を知る」でも上出来に違いなく、これから存分に高橋ワールドを堪能し、学び尽したく思っております。

最後に市大における教員生活について一言申し上げます。私が市大に赴任した頃から謂わゆる大学改革が本格化し、その渦中に巻き込まれた私は幾度も所属教室が変わりました。それに伴い、本来の古典研究を掲げることを控えるよう求められ(つまりは研究するなどのこと)、

心身ともに大きなダメージを受けて長らく苦しみ、家族にも（特に妻に）大きな負担をかけてしまったことは今なお悔やんでも悔やみきれません。

そんな折、突然 K 先生から電話があったのです。K 先生は人文系の某有名研究所の所長もつとめられた、知る人ぞ知る漢文学の大家ですが、私とはたまに研究会などで顔を合わせるぐらいで特に親しいというわけではありませんでした。ところが、人づてに私が改革に翻弄され苦しんでいるとの噂を聞きつけられ、「絶対に専門を変えるな。また大学をやめる必要もない。今どこでも軽佻浮薄な新学科づくりに励んでいるが、そんなものは十年たてば雲散霧消する。自分を見失って潰れた奴は何人もいるのだ」とおっしゃったのです。K 先生の忠告がなくとも私は「転向」しなかつたらうと思いますが、全くの孤立無援だった当時の私には大きな励ましとなりました。そして、たとえ細々ながらも古典研究への志を捨てなかつたことが高橋ノートとの出会いにつながったものと考えています。

それやこれやで、標なき道を試行錯誤するばかりだった私もようやく確かな導き手に出会えました。天才的な研究者でありながら広く知られないまま終わった高橋亨の再評価のためにも、また断絶して受け継がれなかつた朝鮮古典文学研究の空白を埋めるためにも微力を尽くす所存です。幸い十年前より心身は格段に安定し、気力は十分。必ずや所期の目的を達成できるものと確信しております。

末尾ながら新生アジア文化教室の発展を心より祈念します。本来、アジア学科は留学生の安直な受け入れ口などではなく、「似て非なる」アジア諸国家との異文化に正面から対峙し、そこから学び取ろうとするものであるべきでしょう。大学改革の名のもとに同調圧力と「モノカルチャー化」ばかりが強化され、ドメスティックな関心の延長上でしか外国研究がなされないとすれば、日本国の視野狭窄は愈々もって救いがたいものになるでしょうから。

長々お世話になりました。ここでお暇致します。